東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第５回（後編）

**遠くからの声**

これ直接的にこどもらに関係ないかもしれないけれど、そして今だったらもっと大変だったかなと思うけど、当時僕はSNSで攻撃されて。福島で居場所を開くとは何事かと、お叱りのメールはいっぱい受けたんです。早く避難させなさい、と。あなたのやっていることは避難行動を妨げている行動だからやめなさい、とか。活動報告で外あそびみたいなものをあげようもんなら、もう。まぁ今はコロナで、何かすると何事か！ってあると思うけど。当時僕もメールやSNSでいろいろありました。まぁ迷ったけど、正しいことって当時大人の立場としてもわからなかったし、政府発表でここまではいいよ、とか、ここは外出していい地域、住んじゃいけない地域、とあって。でも結局は、こどもとかその親とかと一緒に、自分たちの学びのあり方とか育ちのあり方を決められるほうがいいと思っていました。フリースクールをやっていたこともあると思うけど。いろんな批判はあったけど、親とこどもの気持ちを判断基準にして、じゃあここまではやろうとか、これはできないね、とか。できないこともあったけど、そんな風にやっていましたね。当時、あの中で野外での活動をしている人たちは、本当に大変だったんじゃないかと思います。彼らの苦労は想像を絶するというか。外を出歩くのもどうだ、という状況で、こどもたちを自然の中に連れて行くって、僕の比じゃない批判の目にさらされていたと思いますよ。

余談ですけど、当時僕はお茶を出すのもすごく迷って。出された飲み物を飲まない人がけっこういたんです。水道水を飲みたくない、と。出されたお茶が、水道水かミネラルウォーターなのか、わかんないじゃないですか。だから私は持ってきた飲み物でいいですという方もいたので、けっこう最初の緊張感があって。いちいち確認しなくちゃいけない。みんな立場が全然違うから、水道水どんどん飲む人もいれば、絶対飲まない人もいて。当時はそのくらい放射能に対して気を遣っていました。

**こどもの体重のこと**

こどもが自然とあそぶ学校ネットという団体があって、そこが福島県の委託を受けて、冒険広場設置事業という仮設のプレーパークを作る事業を、2013年くらい、震災から数年経った頃からしていました。僕はその第三者評価をお願いされてやっていたことがあります。その評価レポートとかにも書いたんですけど、体重が増えないこどもの話って、県外でも出ていますか？震災後、福島県内には室内あそび場が各地にできました。要は、あそびが大切だっていうけど、野外であそぶのはどうだって話があるので。市内で一番大きいあそび場はペップキッズ郡山というところで、ヨークベニマルという大きなスーパーの跡地にできたあそび場でした。公設民営で、運営しているのが小児科医の先生なのです。その先生が発表した報告の中に、体重の増加率が例年の25％に留まったという報告がありました。ある年代で、平時だったら3.195キロくらい増える年代で、2012年の報告だと0.81キロしか増えなかったと。これは、県内ではけっこうショックというか。この報告をした医師は、なんで増えないのかというのは仮説でしか出せないですが、こどもはあそんで、たくさんあそぶとお腹が減って食べて、食べて眠くなってたくさん寝て、体を大きくしていくと。健康を研究する人も、運動、栄養、睡眠、が健康の三大要素だと言っているのはよく聞くと思いますが、まさしく運動するから栄養を取って、満たされて寝る、みたいなことが福島はできていないんじゃないか、と。運動がないから。体が大きくなることがいいことって前提ではないんですけど、あそびの確保がとても大変だったなと思っていますね。逆に、肥満児が増えたとか、立って靴下が履けない、かがめないとか、成人病予備軍のこどもたちが増えたという話もありましたが、おそらくデータの対照群が違うんだと思います。小学校高学年や中学生のこどもの肥満率１位は福島だってデータは出ているんですよね。体重が増えないというのは幼児のデータ。あそびが足りないという結論は僕も一緒だと思っています。こどもの体重が26％減とか、肥満率１位とか、けっこうなことが僕は起こったと思うんですけど、それにしては今そういう総括をしていなくて。そういうことに関心がある人たちは学会やいろんな場で議論されていると思うんですけど、けっこう…大丈夫か？って思います。

**失われたのは、習慣**

一旦、外遊びが禁止された地域で、外遊びの習慣というか文化を再び醸成するのは、一定の苦労があると思います。先に御話した、冒険広場を展開する事業やプレイリーダーの方々も、大変苦労があったのではないでしょうか？放射能に対する恐れと言うか、緊張感は年々減っているといると体感しますが、やはり習慣や文化をつくることって年月がかかると思います。そういった取り組みをされている方々に、本当に頭が下がります。

**10年を前に**

震災その後、10年くらい、もう10年目にさしかかりますけど、暮らしている身としてこどもたちの変化というと…難しいな。正直自分の主観ではわからないと言うしかないところがあって、僕はあそび系の人とか、体とかに感度が高い人たちの報告とか聞いていると、そうか、と思います。例えばブランコに乗れないこどもの報告とか。自分の視点が弱い気がしていて、こどもたちに訪れたことって、あの時ってあそびの機会を奪われたってことと、他にも要因がたくさんありすぎて、科学的にこの要因がこの結果という話はすごく難しいんですよね。僕が関わっていた子たちって、移動のことをお伝えしましたけど、ここは避難先で、避難元があって、かなりの子がちりぢりになっていて、つながっている子もいますが、そんなに追えていないというのが正直あります。不登校とかフリースクールの子たちは、その後も、今も付き合いがあるんですけど。なのでその後というのを、こんな感じです、とお伝えできるものがすこし難しいなと。

来年10年目に自分も何をすべきかみたいなことは割と考えていて、コロナ禍となる前はオリンピックで総括の機会はなくなっちゃうんだろうなって思っていたし、コロナ禍となった今もすごく重要な生活課題があるけれど、やはり東日本大震災、原発事故に関しては、現場にいた身で総括しないといけないなと思っています。当時のこどもたちに話を聞いてみたいなと本当に思いましたね。こういうリスクがあるとこうだからこうしましょうという話のために、当時の声とかデータを取るんじゃなくて、何があったのかと、社会として見ていかなくちゃいけないし、そこから考えなくちゃいけないし、だからこどもの中に物語があるんじゃないかって思っているんですけど。自分の立場とか考え方は、ちょっと偏っているかもしれないですが、当時すごく違和感があったことがありました。仮設ってイベントを多くやっていたんですね、クリスマスとかなんとか。で、自治会長さんにあいさつしてもらったりするんですけど、端的に言うと、私たちのためにこどもたち元気になってください、みたいなことをよく言うんです。こどもが元気だとこのコミュニティが元気になりますから、こどもたち元気でいてください、みたいな。僕はそれけっこう残酷なメッセージだなって思って聞いていたんですよね。けっこうしんどい状況で、いろんなこどもたちが暮らしている。大人たちも苦しいでしょうけど、こどもが希望だったんだと思うんです。こども強くあってください、みたいな。僕の立場は、こども強くあってほしいと思っていないんです、弱くてもいいし、強くてもいいし、どっちでもいいんですけど、これは辛いなぁと思って。当時僕らの現場をNHKがずっと取材していたんです。そこのひとりの子が、やっぱり移動を余儀なくされている子で、番組的にも物語が見えたんでしょうね、その子を追っていて。その子はつながったり移動しなくちゃいけなくなったり、父子家庭でいろんな事情があって苦労している子なんですけど。その子の今、みたいなので。その子からはたまに僕にも連絡が来るんですけど、テレビでも見て。東京で専門学校通って夢を追っている、みたいな感じだったんですけど、当時の映像を観ると終始泣いているんですよね。10代の頃の自分を、20代の彼女が番組の中で観ているんですけど、当時の思い出映像はずっと泣いているんですよ。こんなことがあり涙、こんなことがあり涙、みたいな。で、当時の自分に言いたいことはありますか、ってアナウンサーの質問に、強くあれって言ったんですよ。当時の自分に、もっと強くあれって言いたいですねってみたいなことをその子は言ったんですけど、僕はその子の言葉を否定するわけじゃないけれど、いやいやあんなに苦労したんだから泣いて仕方ないって思うし、東京でひとり暮らしているみたいだけど、強くあれって思わないで、苦しい時に周りに助けを求めてほしいし、そういうことであってほしいなって思うんだけど。これも福島に限ったことじゃなくて、世のムードは、個人が強くあれってムードだと思うんですよね。これは全然こどもたちに現れたこととか、こどもたちが言ったことじゃなくて、僕の勝手な思想で、仮説として仲間たちとも話していましたけど、強くあれムードとか、こどもが未来の希望ですとか、原発事故後の福島を再生させる、こどもが希望ですとか、双葉の未来はこどもたちにかかっています、とか。いや前の世代が廃棄物をこどもたちに押し付けんなよとか思っていたんですけど、その中で今どう思っているのかな、みたいなのは聞いてみたいっていうのはありますね。そういう総括もしてみたいですね。

**福島からつながっていくこと**

よく言われる話ですけど、原発事故によって急激に社会課題が顕在化した、と。過疎だったり、地域の持続可能性だったり、教育の問題だったり。けど、一方で全国的に福島が特殊かというと、急速に進んだ面においては特殊かもしれないけど、同じようなことが全国であって。僕は当時も今も思いますけど、福島は多くの方に支えられてきて、一方で福島から返せるものも絶対あるはずだと思っているんです。それはつながっているから、課題が。僕には僕なりの主張があるのですが、イコール子どもたちの声ではないから、こどもたちの声なんかをみんなで拾っていくとか、こどもたちの声の中に意味とか価値を見出していくとか、それぞれの実践、森のようちえんや避難障碍者の方の関わりとかこどもたちの場作りとか、そういうものに還元していくとか。それが原発事故を風化させないというか、あそこから意味を見出していく、そんな作業なのかなと思っています。僕はずっと狭いところ、不登校というところから始めて。ティーン以降なんですね、自分の関わりが多いのは。もうちょっと下の子と関わっていると思うので、そういう実践はどういうものなのかとか知りたいし、何かつながっているところはたぶんあると思うので。

**◎福島県の鈴木綾さんにお話を伺って**

**小林成親**

鈴木さんの物腰はまるで柳の木のような印象を受けた。表情や言葉の選び方、お話の中から垣間見られる考え方。そしてその実践。

さわやかな風も、暴風もあちこちから様々な風が吹いてきて、その都度鈴木さんの心は揺れなびきながらも決して折れることなく、そして同じ風に吹かれている、もしくはもっと強い風に吹かれ折れそうになっている子どもたちとその家族に対し、最大限心を砕きながら寄り添うとするその姿と柔軟なその姿勢には感銘を受けた。

当時の福島の課題は、いま全国の課題として考えなければならないタイミングに来ていると、鈴木さんのお話を伺いながら強く感じたが、そのためにもその当時どんなことを考えながら、どんなことを行っていたのか、もっともっと私たちは話を聞かせてもらわなくてはならないと、図々しくも感じた。

図々しいついでに言ってしまえば、たくさんの人に鈴木さんのお話を聞いてほしい。そしてたくさんの人たちと課題を共有しながら、それぞれの現場で子どもたちと向き合っていければと、白昼夢を見ているかのように考えた。

聞き手・まとめ　小林成親

編集　清水冬音